

写真で振り返る東日本大震災 被災地で何が起きたのか ～311の教訓～

カメライターかさこ
(カメラマン & ライター)

第1章 津波の恐ろしさ



町壊滅。犠牲者の9割が津波。
(撮影:2011.4.20 宮城県石巻市門脇町・南浜町)
※阪神淡路大震災の8割は家屋倒壊。



町壊滅。家も車も何もかもがなぎ倒される。
(撮影:2011.4.20 宮城県石巻市門脇町・南浜町)



石巻雄勝病院には高さ20mの津波が襲い、
屋上に逃げた患者40人および医師・看護婦24人死亡。
生存者は裏山の高台に逃げた人などたった6人のみ。
(撮影:2011.10.9 宮城県石巻市雄勝町)



海岸から約3km内陸の大川小学校は川に駆け上がった津波で、
108人中児童・教職員84人が死亡・行方不明。
地震後どこに避難するか議論になり、
裏山に逃げず川の方に逃げたため被害が拡大。
(撮影:2011.10.9 宮城県石巻市雄勝町)



海そばでなくても津波が川を駆け上がり、内陸にまで床上浸水。
1階の家財道具がやられてしまった石巻市中心部。
道路に使えなくなった家財道具が山積みに。
(撮影:2011.4.20 宮城県石巻市石巻駅そば)



堤防は津波を防げなかった。
(撮影: 2011.11.5 宮城県南三陸町)



低地は壊滅的な被害も、
すぐそばの高台の住宅街はまったくの無傷。
(撮影: 2011.4.20 宮城県石巻市)



宮城や岩手の沿岸部には「津波浸水想定区域」の看板が、
かなりの高台にあちこち設置されていた。
明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波など、
頻繁に津波が襲い、ある程度は「想定内」だった。
(撮影:2011.11.5 宮城県気仙沼市)

第2章 避難所・仮設で起こること



体育館や教室などでの集団生活。
硬い床。寒い。暑い。風呂なし。プライバシーなし。
(撮影:2011.7.24 福島県南相馬市の避難所)



避難所での生活。
こうした場所で数ヵ月過ごさなければならない。
(撮影:2011.5.15 福島県いわき市)



ボランティア迷惑論はウソだった。
今回の震災ではボランティアが大活躍。
物資仕分け、炊き出し、話し相手などいくらでもやることはある。
(撮影:2011.4.20 宮城県石巻市)



被災地から約1600km。
宮崎から風呂を作って支援に訪れた人もいる。
ボランティアに行けない言い訳より、行く方法を考えたい。
(撮影: 2011.7.24 福島県南相馬市の避難所)



偏る支援物資。首都圏でパンが品切れ続出の3月(写真右)に、福島いわき市の避難所では、食べきれない量のパンが、毎日のように送られて、被災者を“苦しめた”(写真左)。(撮影:2011.3.30 福島県いわき市の避難所)



偏る支援。テレビで報道される被災地には、
ボランティアや物資が集まり、
報道されない被災地には支援が皆無。
メディアに取り上げてもらおうと、
ガレキの家に花の絵を描いて支援を必死にアピール。
(撮影:2011.9.23 福島県いわき市久之浜)



被災地では物盗りが大きな問題に。
金融機関などでは現金を災害直後にできるだけ持ち出した。
(撮影:2011.5.14 福島県いわき市薄磯)



被災地の復旧・復興の妨げとなっている原発事故。
福島原発20km地点では、
防護服に身をまとった人々のバスが何度も行き交う。
(撮影:2011.6.19 福島県広野町)



放射能の恐ろしさは見えないこと。
高い放射線量で帰村が困難となっている飯館村。

大気は2.20マイクロシーベルト／時、
草むらは14マイクロシーベルト／時。

ガイガーカウンターがなければ、危険かどうかまったくわからない。

(撮影:2011.7.23 福島県飯館村)



避難所から脱して仮設住宅に入居しても困難は続く。
家財道具は一切ない。狭い仮設住宅。
知らない人ばかり。不便な生活に寂しさが募る。
(撮影:2011.7.3 福島県いわき市)



被災地で問題となるのは運動不足。
動かないことが多くなり、歩行が困難になるなど、
身体機能が悪化する恐れも。ボランティアがリハビリを行う。
(撮影:2011.10.9 宮城県石巻市雄勝町)



避難所や仮設住宅ではペットが禁止のところも。
家族同然のペットを人に預けなければならない被災者も。
(撮影:2011.8.7 福島県いわき市)

第3章 復興に向けて



4月の被災地の様子。半年後にどうなったのか次のスライドを。
(撮影:2011.4.20 宮城県石巻市門脇町・南浜町)



ガレキは片づいた。しかし町を再興するには程遠い状況。
(撮影: 2011.10.10 宮城県石巻市門脇町・南浜町)



ガレキが片づいたといっても、ただ集めただけで、
ほとんど処理できずに山として積まれている。
(撮影:2011.6.19 福島県いわき市)



被災者を支援するために行われたイベントで、
無料でふるまわれた食事が大量に残される。
支援慣れが被災者の自立を阻害しかねない。
(撮影:2011.7.2 福島県いわき市)



今回の震災被害を忘れてはならないと、
今後の防災教育に活かすため「災害遺構」を残す動きもあるが、
被災者の心情から撤去されるところも。
(撮影:2011.10.8 宮城県石巻市雄勝町)



「津波のコンチクショーめ！」
仮設住宅に住むおばあちゃんたちは、
近所の人たちもそばにいたので、
苦しい最中、笑顔を忘れず生活している。
(撮影:2011.10.8 宮城県石巻市雄勝町)



「もともと過疎化していて、そこに震災が追い打ちをかけた。
だから元通りに直したところで復興はできない。
今までとは違ったことをしないと」と旅館を営む村上さん。
観光客誘致の新たな取り組みを始めている。
(撮影:2011.11.6 宮城県気仙沼市)



忘れてはならない311。
東日本大震災での出来事を教訓に、
災害が起きることを前提に、
社会をつくっていかなければならない。
もう「想定外」という言い訳をして、
「人災」を拡大させてはならない。



希望なんて軽く言ってはくれない。
でも希望なしでは生きていけない。

復興はまだ始まったばかり。

被災地で起きたことは
今後の災害の教訓になる。

被災地取材レポートは
「かさこワールド」に掲載

<http://www.kasako.com/110311top.html>



3月中旬発売予定！

検証 新ボランティア元年

～被災地のリアルとボランティアの功罪～
共栄書房、笠虎崇著 1500円＋税

大手メディアでは報道されない、被災地で起きた様々な苦悩や葛藤や歪みを現地取材をもとに一冊にまとめた、かさこ渾身の最新作。

今後の復興や被災地支援のあり方を考える一助となるだけでなく、自分自身が被災者になった時、どんなことが起きるのか、美談ではない現実の一端を知ることができるリアルルポ。